1　はじめに

１．はじめに

経済産業省が提唱する社会人基礎力は「将来のニッポンを支える若者」が育って欲しいという願いから生まれたものである。それは、「将来の社会を担って立つ人材」の育成を建学の精神にする京都産業大学と想いを同じくしている。

京都産業大学は、本学の建学の精神に則り、人材育成に邁進してきた。その間、インターンシップを活用した４年間の一環教育（O/OCF:On/Off Campus Fusion）を開発し、日本型コーオプ教育（Cooperative Education）として展開してきた。それが、キャリア教育研究開発センター設立のきっかけになった。

キャリア教育研究開発センターのもとでインターンシップを活用したコーオプ教育を推し進めてきたが、そのうちに、日本では、本格的なインターンシップは根付きにくいのではないかと考えるに至った。そこで、インターンシップをＰＢＬに置き換えたらどうかという発想を持った。

当初は、体育会クラブ所属学生を対象にして、社会人基礎力育成を目標にしたＰＢＬ型授業を試験的に実施した。これは、体育会クラブ所属学生を立派な社会人に仕上げたいという想いがあったからである。さらに、クラブ活動という社会人基礎力を鍛える場を彼らは日常的に持っており、好循環が期待できるのではないかと考えたからである。

単位なしの試験的な授業にもかかわらず、18 名のアスリートが参加してくれ、１学期間授業を実施した。そして、学生の「頭の働かせ方」と「精神的タフネス」（いずれも、適性科学研究センターの検査を用いた。）とを事前・事後に測定し、彼らの内面的成長を測るツールにした。わずか１学期間 15 週の間の授業であったが、測定の結果は予想を超える驚くべき成長を示した。

次年度には、本プログラムの原型になる授業を正規の科目に立ち上げ、実施し、50 名の学生が履修した。この授業を通して、一つの貴重な気づきを得ることになる。企業から課題を提供してもらい、１学期間取り組む受講生の様子を観察していると、彼らは、１学期間通して、しかも基本的には学内で密度の濃いインターンシップを体験しているのである。まさしく、On Campus Internship である。

以上の実績にもとづいて開発された本プログラムは、平成 20 年度「体系的な社会人基礎力育成・評価システム構築事業」のモデル大学に採択され、成果報告書を作成・公開する時期を迎えるに至った。本プログラムには、過去２回にわたるノウハウが結集されていることになる。

まず、本プログラムでは、観察することのできる「〇〇できる。」という社会人基礎力の外面評価に加え、社会人基礎力を内面から支えている要素も評価している。内面的な要素の向上がなければ、折角の「〇〇できる力」も情況に応じて柔軟に発揮することができないからである。

また、本プログラムも含めれば、過去３回の実績があることになり、社会人基礎力育成のためのメソッドもいくらか蓄積されてきた。本成果報告書では、まだ暫定的なものではあるが、それらのノウハウを広めるべく、新たに「社会人基礎力育成のためのメソッド」の項目を追加した。

さらに、本プログラムでは、社会人基礎力育成・評価システムを学外に広める工夫をしている。本成果報告書では、社会人基礎力育成・評価システムを学外に広めるための活動記録も、新たに項目を設けて掲載している。

この成果報告書の「５.事業の成果」で、受講生の社会人基礎力の成長ぶりが分析されている。「〇〇できる。」という観点からの外面評価の結果は、全体として、自己評価、他者評価ともに成長を示している。また、内面評価の値も、全体として向上している。さらに、社会人基礎力についての肯定度に関する分析では、このプログラムの受講生と非受講生との間には顕著な差がみられている（株式会社ベネッセコーポレーション調べ）。

この成果報告書が、社会人基礎力とその育成・評価システムの広がりと、「将来のニッポンを支える若者」の輩出に少しでも貢献すれば幸いである。